
東方の月 西方の翼

神無月ふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方の月 西方の翼

【Nコード】

N2199S

【作者名】

神無月ふみ

【あらすじ】

デクター・ミランは、留学先のビュレント国へ行く船の中で、奇妙な青年と出会った。名前は、グレン・オールドスタイン。同じ留学生だというが、他の留学生と違う、際だった個性の持ち主だった。やがて二人は事件に巻き込まれ、グレンは意外な人物と再会するのだった……。

1（前書き）

一応前作（グレンの子供のころの話）があります。

<http://ncode.syosetu.com/n0339j/>

読まなくても、この小説は分かるようになっていますが、お氣が向きましたら是非どうぞ。

他にもいろいろありますので、是非サイトのほうにもおいでください。

<http://fumik331.web.fc2.com/index.html>

潮風に吹かれながら空を見上げると、真っ青な空にたなびく灰色の煙が見えた。

大洋を渡る豪華客船を動かしている、蒸気タービンから出ている煙だ。三本ある巨大な煙突のうち、二本から吐き出されているのだから、デクター・ミランの座っている位置からは、船自体が大きすぎて煙突全体を見られない。

「暁の乙女号」という船は、小さな町のような。寝泊まりする場所はもちろん、食事をするところも遊技場も、ペット用の船室さえある。

ヴィラムからビュレントへ行く長い航海の間、退屈せずに済むように様々な趣向が凝らされており、実際ほとんどの乗客は航海を楽しんでいることだろう。

だがデクターは退屈だった。いまでも、同席している留学仲間のお話を聞いているふりをしながら、オープンデッキにあるカフェの椅子に腰掛け、空を見ている。航海があと一週間も残っていることを考えると、憂鬱になってきた。

同席している四人は、デクターの様子に気づくことなく、話し続ける。

「現在のヴィラムは、何もかもビュレントの言いなりで自由がない。本国では『自由の国ビュレント』などと謳っているくせにだ」

留学仲間の一人が熱弁を振るう。

「我々は戦い、ビュレントから独立を勝ち取らなければならない。そのために我々は、ビュレントで学ぶのだ。戦う前に、まず敵を知らねばならないからな」

今日も空が青い、とデクターは思った。海が荒れずに済むのは嬉しいことだが、ここはあまりにも暑すぎる。日光浴が大好きなビュレント人ならともかく、ヴィラム人である自分たちが何故、好きこ

のんでこんな暑いところに座っていなければならないのだろう。

一緒にビュレントに留学するヴィラム人との、つきあいをおろそかにするつもりはない。ビュレント人だらけの船内で個人行動をすると、愉快でないことが増えるのだ。

しかしいま流行の「分離独立主義」を、四六時中振りかざされるのも問題だ。聞いているだけで疲れてくる。

「見たまえ」

一人がデクターの背後を指さす。

「ビュレント人が富を搾取しているから、ヴィラム人はいつまでも貧しい生活を強いられている。あのようにビュレント人は客として、ヴィラム人は働き手として船に乗るしかない」

——自分たちだって、客として乗っているじゃないか。

デクターたちはヴィラム人の中でも、例外的に「富裕層」と言われている身分である。確かに成功したビュレント人ほどではないが、親は息子を豪華客船に乗せ、ビュレントへ留学させられるだけの資産はあった。

——そんな人間が、ヴィラム人の困窮について熱弁を振るったところで、説得力がないな。

心の中で愚痴を言いながらも、表だって反論はしない。狭い世界では、些末なことで人間関係に波風を立てるべきではないのだ。

デクターは促されるままに、留学仲間が指す方向を見た。

たくさんのテーブルの間を縫うように移動しながら、ヴィラム人がビュレント人の給仕をしている。

指は真っ直ぐ一人の青年を指していた。

二十歳前だろうか。おそらくデクターより、少し年下だろう。

長めの黒い髪と華奢な身体つきのせいで、一見軟弱そうに見えた。身のこなしは上品で、常に親しみを覚えるような微笑みを浮かべている。接客技術は完璧だ。

客船で働いているヴィラム人なので、下層階級の出だろう。この船では一流ホテルと同程度の従業員教育をしているらしいので、青

年が出自に似合わぬ優雅さを持っているのも、当然だ。他の従業員も接客は丁寧で、青年と同じように、常に愛想の良い微笑みを浮かべているのだから。

だが彼は、他の者と違うのだ。歩き、話し、笑う。ただそれだけなのに、一つ一つの動きに目が離せない。

おそらく他人とは目の輝きが違うからだ。

あれは、この世にあるすべてのことに興味を持ち、未来に希望を持っていて人間の目だ。たとえ絶望的な状況でも、ためらわず前へ進んでゆくのだろう。そう思えるような力強さがある。

だから彼はビュレント人に対して礼儀正しく接しても、卑屈な態度を取らない。かといって肩肘を張るところもなく、ごく自然な態度を取っている。

——それに。

デクターは目を擦る。

気のせいかな、青年の周囲に霧が立ちこめているように見えるのだ。時々白い霧が光り、まるで青年が輝いているかのようだ。

天気が悪いわけではない。うんざりするほど快晴で、霧どころか雲一つない。

留学仲間の声で、デクターは我に返る。

「彼のような人間は、ビュレント人のくびきから開放されなければならぬ。我々はそのために、断固戦い……」

あの青年を目の当たりにしながら、平然と話を続ける留学仲間に、デクターは驚いた。

彼らには光る霧が見えないのだろうか。それとも光る霧など本当は存在しなくて、単に光の加減による目の錯覚なのだろうか。

しかしあの青年が、特別であることは間違いない。偶然かもしれないが、留学仲間とて無意識のうちに、大勢のヴィラム人の中から彼を選んだのだ。

あの青年には、無意識のうちに人を惹きつける力があるのかもしれない。現にデクターは、ずっと青年から目が離せなかった。

——あれは誰なんだ？

直接本人に訊ねるべきだろうか。しかし「お前は誰だ」と訊いたところで、分かるのはせいぜい名前ぐらいだろう。光る霧の正体を正直に話すとは思えなかった。

だが名前ぐらいでも、訊いておくべきかもしれない。

決意し、立ち上がりかけたとき、青年は厨房へ消えていった。デクターは待ったが、それきり青年は姿を現さなかった。勤務交替の時間が来たのかもしれない。

——明日、捕まえるか。

柄にもなく他人を気にしている自分に気づき、デクターは苦い気持ちになった。

どうでもいいことなのだから、忘れてしまえばいい。理性はそう言うが、同時に胸が苦しくなるほどの好奇心が膨らんでゆく。

——疑問を解決するために、質問するだけだ。他に理由はない。

デクターは、そう自分を納得させると、再び留学仲間の話に耳を傾けるふりをした。

それから毎日、デクターはそのカフェに通い詰めた。

だが問題の青年は、いない。時間帯を変えて行ってみても、彼の姿はどこにもなかった。

船はどこにも寄港していないのだから、船内のどこかにいるはずである。しかしあてどもなく探すには、一週間という期間は短かく、「暁の乙女号」は広すぎた。

ビュレントに着く前日も、デクターはカフェに行った。しかしやはり青年の姿はない。

デクターは、ため息をついた。

解雇されたか、それとも別の事情が分からないが、青年はすでにここで働いていない。

明日になればデクターは、下船しなければならなかった。

もし解雇されたのなら青年も下船するだろうが、そうでなければこの船で働き続けるだろう。いずれにせよ、もう二度と会うことはない。

デクターは自分の目的が、当初と違っていることに気づく。ただ疑問を解決したいだけだったのに、いつの間に「何が何でも話をしたい」などと考えてるようになってしまったのだろう。

デクターは自分自身に腹が立つてきた。

たった一回会ったきりの、しかも男を必死になって捜すなど、自分らしくないことだ。ビュレントへ着いたら、白く光る青年のことを忘れ、学生生活を楽しむべきだ。

下船の準備をしようと、船室へ戻ろうとしたとき。

「お客様、どなたかお捜しですか？」

背後から呼びかけられた。

振り返って声の主を見たとき、デクターは、あやうく声を上げそうになる。

ずっと探していた青年が、目の前にいた。

遠目では気づかなかったが、思ったより背が低い。デクターの目の位置に、頭がある。もつともデクターは、ヴィラム人の中では長身なので、一般的なヴィラム人男性の中に混じると、特別低いわけではないだろう。

間近で見ても端正な顔立ちだ。思ったよりも生意気そうな顔をしている。

いまも困っている旅行者を助けるというより、不審者の首根っこを捕まえたと言いたげな顔だ。

だがデクターを惹き付けてやまない、強い目の輝きは変わらない。彼を見た瞬間、夏の太陽と同じぐらい鮮烈な印象を受けるはずだ。顔を見ているだけで、デクターは落ち着かない気持ちになった。

だが一つ、以前と違っていることがある。

彼が身にまとっていた、霧のような光が消えている。あの輝きは、どこへ行ってしまったのだろうか。

デクターは真つ直ぐ、青年を見る。

「きみを捜していた。訊きたいことがあったから……」

「やはりそうでしたか」

青年は意地悪そうな顔になった。

「同僚が言っていました。誰かを待ち伏せしているヴィラム人がいるって。ちょうど一週間前に辞めた俺に用事があるんじゃないかと思っていたのですが、予想どおりでした。……で、俺に何か？」

デクターは迷った。光について話すべきか、それとも世間話をしてから様子を見るか。

いきなり光の話をするのは、デクターの常識では論外のはずだった。ただでさえ警戒されているのに、頭のおかしな奴と判断されて逃げられかねない。

だがこの青年相手には遠回しではなく、最初から正直に言ったほうがいいような気がしてきた。

こちらが追い回していると分かっていて、逆に話しかけてくるような度胸の持ち主なのである。少々のことと動じるとは思えない。嘘をついたところで、即座に見抜かれてしまいそうだ。

デクターは覚悟を決めて言う。

「信じられないかもしれないが、きみが光の霧をまとっているように見えたんだ。何故なのか気になって捜していた。本当に光っているのか、本当ならどうしてなのか、知りたいと思つてね」

思ったとおり青年は、訝しげな表情になった。だがデクターのことを気味悪がっている顔ではない。

「……そんなことを言ってきたのは、あんたで六人目だ」

青年は不本意そうに言う。

「正直、自分では見えないから信じられないのだが……何人も見たのだから本当なんだろうな」

デクターは驚いた。まさか、あっさり肯定されるとは思わなかったのだ。

「どうしてそんなことになっているのか、原因に心当たりはないの

か？」

「ない。特に実害もないし、調べるのも面倒くさい。——用事はそれだけか？　じゃあ、そういうことで」

青年は手を振り、去ろうとした。

デクターは思わず、その腕を掴む。

青年は訝しげな顔で振り返った。

デクターは後悔する。自分が何故腕を掴んだのか、理由が分からなかった。

だが手を放すつもりはなかった。ここで別れたら二度と会えない気がしたからだ。

後日冷静に考えてみると、青年と二度と会えないことなど、どうでもいいことだった。行きたければ、行かせればいいのだ。

なのに、できなかった。代わりに、別の言葉が出る。

「そんなぞんざいな喋り方をしているから、クビになったのか？」

青年は明らかに、むっとしていた。引き止めかたとしては最悪だが、少なくとも青年は足を止めた。

「クビになったんじゃない。最初からそういう契約だった。今日で契約切れだ。それから言葉遣いだが、勤務中は、きちんとしていたぞ。丁寧に接客したせいかな、お前みたいに俺を追い回す人間があと三人いたぐらいだ。——ただ面と向かって話をし続けたのは、お前が初めてだな」

皮肉のつもりなのか、単に青年が率直な人間なのか分からない。

デクターは続けて訊く。

「航海の途中なのに、どうして辞めることができたんだ」

「元々、片道だけ働くことになっていたんだ。ビュレントに用事があるの、ただ船に乗るより、金を稼ぐことができていいだろう？」

「よくそんなことが許されたな。こんな豪華客船では、あり得ないことだぞ」

「そうなのか？　あっさり何とかなった。乗船直前に従業員が急に辞めたのかな」

その可能性もある。だがデクターは、単に船の都合だけではなく、青年自身の持つている何かのせいで、無茶な要求が通ったような気がしてならなかった。

青年は惘然とする。

「俺はどうして、初めて会ったお前に、こんなにぺらぺらと自分のことを話しているんだ。不公平だ。お前も何か言えよ」

「何かって……何を？」

思ってもいなかったことを言われ、デクターは困惑する。

青年は不機嫌そうな顔のまま続ける。

「客として乗っているのだから、大金持ちだろう？　しかもヴィラム人なんだから、ビュレント人の有力者にコネがあるんだろうな。何しにビュレントへ行くんだ。旅行か？　それとも社会勉強か？」

「留学だよ。ロンヴァール大学へ、経済学を学びに行く」

デクターが渋々答えると、青年の目が丸くなった。

「同じ学校か」

今度はデクターが驚いた。

「同じって……そっちも留学目的だったのか」

ロンヴァール大学はビュレントでも歴史の古い、名門校である。

植民地からの留学生にも門戸を開いているのだが、それでも優秀な成績を収め、経済的にも恵まれていないと行けるところではない。

ただの給仕人だと思っていた青年が、実は自分と同等の立場の間人だとは思わなかった。　話せば話すほど謎ばかりが増えてゆく、

計り知れない相手だ。

デクターが驚いていると、突然青年が笑った。

何がそんなに面白かったのか分からないが、声を上げて愉快そうに笑っている。

目尻が下がり、ぶっきらぼうに喋っていたときと印象が変わる。人なつっこい笑顔で、まるで少年のようだ。はじけるように笑うとは、こういう表情を言うのだろう。

「お前、驚いた顔になると、間抜けな顔になるなあ。ずっとスカし

た顔をしていたから、落差がおかしい」

涙を拭きながら、青年が言った。

「……お前は俺の顔を見て笑っていたのか」

デクターは憮然とすると、青年は、いたずらっぽく笑う。

「怒るなよ。身分や持っている金の量は違っただろうが、同じ留学生じゃないか。仲良くやろう」

青年は右手を出してくる。

「グレン・オールドスタインだ。よろしく」

デクターも右手を出し、握り返す。

「デクター・ミランだ。——オールドスタインとは、大層な名字だな。まるで昔のビュレント人の貴族みたいだ」

からかい半分に言っていると、青年——グレンは肩を竦める。

「ビュレント人の名字なんだよ。俺はビュレント人の神父がやっていた孤児院にいたんだが、その神父が自分の親戚の名字をつけてくれたんだ。俺の両親は国家反逆罪の汚名を着せられて処刑されたので、名字を変えたほうがいいだろうって」

ヴィラム人には、よくある境遇である。とはいえ、話として聞くのではなく目の前で告げられると、何と云っていいか分からなくなつた。

当のグレンは平然と続ける。

「そっちこそ、ミランだなんて。昔の中部ヴィラム王朝の王族と、同じ名字じゃないか」

「ああ」

デクターも、普段は赤の他人に言わないことを、つい言ってしまう。

「亡くなった祖父が、最後の国王だった。だから名字が同じなんだ」

「じゃあ、世が世ならば、お前は王太子か」

「そういうことだ。いまでは君臨するどころか、ビュレント人に押さえつけられて身動きができない状態だがな」

デクターはグレンの顔を見ながら、納得する。人の驚き顔という

ものは、確かに間抜け面になる。グレンが笑い転げていたのも、無理はない。きつといま鏡を見せたら、グレンは自分の顔を見て笑うだろう。

考えているうちに、デクターも笑いたくなくなった。

我慢できなくなつて吹き出すと、グレンも一緒になつて笑つた。

「王子様と貧乏人が同じ船に乗つて、同じ大学に通うようになるのか。凄いな」

「百年前だつたらあり得なかつたかもしれないが、いまでは普通のことだろ。ましてや俺たちがこれから行くのは、自称『自由の国ビュレント』だ。何が起きてもおかしくない」

「違うない」

デクターは楽しくなつてきた。

ヴィラムを追い出されるように留学することになったが、こんな面白い出合いがあるとは思わなかつたのだ。広い世界を見て来いと言つた両親に、感謝すべきかもしれない。

グレン・オールドスタインは、変わった男だった。

少なくともデクターは、一度も見たことのない種類の人間である。光る霧をまとっていることなど、些細なことに思えるほどだ。

まず、貧乏だった。

「ビュレントへ留学できたのも、いろんな人の寄付のおかげだから、金の無駄遣いをするわけにはいかない」

と言つて、野菜の切れ端を囓っていた。切り詰めた生活をしているらしく、服もろくに持っていない。ウィラム人の中では地位と金のある人間に囲まれていたデクターは、グレンのような人間と接したのは、初めてだった。

授業に出ているとき以外は、四六時中働いている。デクターが見るグレンの姿は、寝ているか働いているかの、どちらかしかなかった。

そのくせ、成績は恐ろしくいい。学業に関して自信があったデクターも、その自信が打ち砕かれそうなほどだ。教授受けも良く、「独創的な考えを持つ生徒だ」と始終褒められていた。

不思議なほど人を惹きつける力は、大学に入っても健在だ。

周囲には常に人が集まり、輪の中心でグレンがいつも笑っている。デクターには、グレンの持つ光の霧が、グレンの人望と無縁だとは思えなかった。

その証拠に、光が強いときほど人がグレンに寄ってくる。虫が光を目指して飛んできているようだった。

やっかいなことに惹きつける人間は、味方だけではない。好意を持たない人間も惹きつけるらしくて、グレンは始終絡まれた。グレン本人も慣れているせいか、ケンカには強かった。

「俺はケンカに強いわけじゃない。ただ要領がいいだけだ」

グレンは言う。

「集団で来られたときは、相手が手を出してくる前に、敵のアタマを倒す。浮き足立っているときにもう一撃を食らわせると、たいていは引く」

「引かなかったときは？」

デクターが訊くと、グレンは笑った。

「もちろん、逃げるさ。ただ、こっちが勝ったと誤解させてからがいいだろうな。とにかく、手を出したらひどい目に遭うと、思わせることが大事だ。だから本当のところ、俺は噂になっているほどケンカに強くない。強そうに見せているだけだ」

「余計な人間まで惹きつける体質は、思ったよりも面倒なものだな」
呆れ半分にデクターが言うが、グレンは平然としている。

「戦ってかまわない相手なんだから、気が楽だ。昔、身内を人質に取られて、手出しができなかったときに比べると、どうってことない。反撃できるだけ、ましだ」

どうやらデクターが思っているよりも、修羅場を多くくぐり抜けているらしい。

一番驚いたのは、女絡みの話が出たときだった。

他の留学生仲間とデクターの部屋で酒を呑み、皆で売春宿へ行く話になった。

デクターは断った。数日前に、自分を巡って二人の女が対立し、女はしばらくこりこりだと思つような目に遭つたからである。

グレンも断った。

他の全員は街へ繰り出し、部屋にはデクターとグレンだけが残った。

「……行かないのか？」

デクターが訊くと、グレンは、あつさり言う。

「金がない」

「女に注ぎ込む金すら、惜しむのか？」

からかい半分で訊くと、グレンは慚然とする。

「金を払って女とやるってことが、なじめないだけだ。お前のように、二人の女と同時に恋愛できる、器用で財力のある奴には分からないだろうがな」

痛いところを突かれて、デクターは言葉に詰まった。

だが言われっぱなしでは悔しいので、意地悪く言い返す。

「ずいぶん純情なんだな。商売女の相手をするのは、嫌なのか？」

「そういう意味じゃない」

「ビュレント人の女なんて、ヴィラムじゃあ、商売女でも相手にしてもらえないぜ。いまのうちに楽しんでおいたほうがいいぞ」

グレンが困惑したように、眉を寄せていた。デクターは、自分の浅ましさを非難されたような気がしてきて、ぶっきらぼうに付け加える。

「まあ、お前の場合は立っているだけで、いろんな人間が寄ってくるから、確かに売春宿へ行く必要はないだろうな」

嫌みっぽくならないように言っただつたつもりだったが、刺々しくなつたような気がする。だがデクターには、訂正するつもりはなかった。グレンは眉を寄せたまま言う。

「誤解があるみたいだな。俺は単に、金を払うことがなじめないと言っているだけだぞ」

「どういうことだ」

グレンは、あっさり言った。

「俺は払うほうじゃなくて、貰う立場だつたんだ」

デクターは、酒の入ったグラスを落としそうになつた。

「……いま、『貰う立場』って言ったよな？」

衝撃が冷めないままデクターが訊くと、グレンは平然とした顔で頷いた。

「妹が生きていたころ、あんまり貧乏だったので、ビュレント人居住区の賭博場で働いていたんだ。最初は知らなかったんだけど、その二階がそういう店だった。正直、身体は疲れるし、精神的にも堪える仕事だったが、けっこう金になった」

「金になった……って、お前……」

「ヴィラムにいるビュレント人って、人生投げているんじゃないかってぐらい、金を使うよな」

グレンは、屈託なく笑った。

デクターは息を呑む。

グレンはいまも、始終働いている。飲食店での接客業なので、ビュレント人から話しかけられることも多いだろう。ならば――。

「ま、まさか、いまも……」

「さすがに、やっていない。養わなければならない妹も死んでしまったし。あれほど必死に金を稼ぐ必要は、なくなったからな。それに続けていて、もしもばれたら、俺を孤児院に引き取ってくれた神父様が気絶しそうだ」

デクターは、ため息をつく。

「俺も気絶しそうになったぞ。そのころは子供だったくせに、なんて無茶なことをやっていたんだ」

「子供だったから、よけいに金になったのかもしれない。世の中には、いろんな奴がいるなど、あのとき心から思った」

何も言えずにいると、グレンは、にやりとする。

「金に苦労したことなさそうなお前には想像もつかないだろうが、貧乏ってというのは大変なことなんだぜ」

悲惨な過去も笑って済ませられるようになるまで、どれほどの時間がかかったのだろう。

デクターはグレンの隣に座り、頭を、ぐしゃぐしゃと撫でる。

「お前って強いな、グレン」

グレンは抵抗することもなく、撫でられるままにいる。甘えているというより、自分の考えで心がいっぱいになり、気に留めていないようだ。

グレンは、ぽつりと言う。

「俺は強いわけじゃない。ただ、生きるための目的があるだけだ。

――でなければ、とつくに死んでいた」

「何だ、その目的って」

グレンが一瞬、真剣な顔になった。だがすぐに、いつもの人なつつこい笑顔になる。

「秘密だ。口に出したら、叶わないような気がするから」

「お前にしては弱気だな。そんなに、あっさり壊れてしまいたいような願いののか？」

グレンは即答しなかった。少し考えたあと、苦笑いする。

「そうだな。どうしても叶えたいから、慎重になっているのかもしれない」

それ以上、何も言わず、グレンは窓の外を見た。

デクターはグレンの横顔を見つめる。

グレンと話をしていると、すべてのことが新鮮に感じる。

これまでお互いが通ってきた道が違いすぎるので、考え方も価値観も違う。意見の違いも、愉快なことに感じられてしまう。

気がつくとデクターは、他の留学生仲間ではなく、常にグレンと一緒にいた。

「高貴な生まれだから、下賤の者が珍しいのだ」

陰口を叩く者もいたが、デクターは無視した。幸いグレンも陰口を気にしない性格のようで、卑屈になることも、デクターを避けることもしなかった。

デクターは毎日が楽しかった。

ヴィラムに居たころは退屈だった学生生活も、ビュレントでは嘘のように愉快だった。

このままずっと続けばいいと思っていたとき、事件が起きた。

ヴィラムよりも緯度が高いビュレントでは、冬の始まりは早く、春の訪れは遅い。

しかし春は日に日に、確実にやって来ている。

デクターは雪も、凍り付くような風も経験したことがなかった。ビュレントの冬に飽き飽きしてただけに、春の訪れを心から歓迎せずにはられない。

だがビュレント周辺国の不穏な情勢は、春になったとたん悪化してきた。

ビュレント国のあるローダスタ大陸は、古来から戦乱の絶えない地域である。

二十年前に大きな戦争が終結して以来、ローダスタ大陸では平和が続いていた。

しかし去年の秋に、ジェルーマ共和国が強力な指導者を得て、周辺各国に脅かし始めたのだ。

隣国同士のビュレントとジェルーマは互いに強国であるため、現在、表だって対立はしていない。しかし、いずれは利害の不一致で戦争になるのではと、人々は噂をしていた。

太陽は輝いているのに、首都を覆う空気は重苦しいものだった。

去年の夏——ここへ来たばかりのころは、ビュレントも太陽のように輝いていた。なのに一年も経たないうちに、冬の闇が迫っているような雰囲気になっている。

かといってデクター自身は、どうすることもできなかった。帰国するでもなく、ただ情報を集めながら情勢を見つめるしかない。

グレンはデクター以上に、情報集めに熱心だった。毎日新聞を読み、どこかへ出かけ、部屋にいるときは黙って何かを考えている。

今日も狭い通りに面したカフェで、グレンは新聞を広げて、熱心に読んでいた。

このカフェにはビュレント人よりも、ビュレントの植民地から来た人間が多く出入りしている。大通りに面した、ビュレント人が出入りする美しいカフェと違い、仕事にあぶれた、犯罪者の一步手前のような人間が大勢来ていた。

お世辞にも客層が良いとはいえないが、それゆえにデクターたちも出入りしやすい。

デクターはグレンの横に腰を下ろした。グレンは相変わらず物も言わず、じっと紙面を見ている。

「今日も『ビュレンツ』を読んでいるのか？」

グレンは頷いた。何紙かあるビュレントの新聞の中で、グレンが買って読んでいるのがビュレンツだ。あとの新聞は、持ち前の才能を生かして人から貰い受けている。

「これが一番面白いからな」

そう言うグレンの気持ちが見分らないでもない。

『ビュレンツ』は大手新聞社ではない。そのせいか無茶な方法で取材した、きわどい記事が多い。ときには驚くような内容のものを、どこよりも早く載せていた。ただ先走りすぎて、信憑性に欠けるところもあつたのだが。

デクターは別の新聞を差し出す。

「さつき、そこで配っていたやつだ。読んだか？」

「いや」

デクターは号外をグレンに渡す。

「ジェルーマ共和国のストラディア共和国併合を、ついにビュレントが承認した」

グレンは号外に目を通したあと、忌々しげに言う。

「欲深い隣国が別の国を飲み込むのを、ビュレントが認めたということか。ビュレント国の偉い奴は、阿呆揃いなのか？ 次は自分たちの国がやられることぐらい、想像が付きそうなものだが」

「考えたくないのだろうさ。ビュレントは二十年前の戦いにかろうじて勝ったとはいえ、かなり疲弊した。国民は皆、戦争はこりこり

だと思っている。政治家たちもだ。だからジェルーマ共和国を甘やかせば、こちらに侵略してこないだろうと思いたいんだろう。それでも承認するのに、二ヶ月もかかったがな」

「結局認めたのなら、時間をかけようがかけまいが同じことだ。ビュレントの、おやさしい気遣いが、ジェルーマに伝わればいいがな」
グレンは皮肉な口調で言った。

デクターはコーヒーを飲みながら呟く。

「戦争になると、やつかいだな。俺たちはヴィラムへ戻ることになるだろうが、ちゃんと船は出ると思うか？ 出ても沈められる可能性もあるだろうが」

「どうか。ジェルーマは数ヶ月前に、北方の国とやり合って二つの国を併合したが、そのとき巡洋艦が何隻も沈められて、大きな被害が出た。いまだその影響は残っている。戦争になっても、すぐに制海権を握れるとは思えない」

グレンは戦争の話になると、妙に熱が入る。特に戦略や戦術に関することになる、デクターが訊かなくても、ずっと喋り続ける癖があった。

「ジェルーマも、まずは普通に陸からビュレントを押さえようとするはずだ。だから俺たちも、ビュレントがやられる前に出国すればいい。ジェルーマが仕掛けてきたら、ビュレント人の難民であふれかえるだろうから、時機を逸さないように気をつけないといけないだろうな」

「難民って……」

デクターはグレンを、じろりと見る。

「お前、ビュレントが負けると思っているのか、グレン？」

グレンは肩を竦める。

「当然だろう。何故なら……」

そのとき店内に、甲高い女の声が響き渡る。

「そこをどいてちょうだい。邪魔よ！」

デクターが振り返ると、一人のビュレント人女性が、自分よりも

遙かに大きな男を睨みつけている。

思わず口笛を吹きそうになった。輝く金髪の持ち主である女は、大変な美人だったのだ。

動きやすそうなパンツスーツを着ており、勝ち気そうな顔をしている。男に媚びを売ることとは、無縁そうな職業に就いていることは間違いない。

大柄の男は低く笑う。

「どくわけには、いかねえな。だいたいビュレント人のお姉ちゃんが、こんなところへ来るなんて、どうしたんだ？俺たちに誘ってほしいのか？　だったら別の部屋で、ゆっくり相手をしてやってもいいぜ」

次の瞬間、女は男の頬を平手で打った。驚く男に、女は続けて股間に蹴りを入れる。

デクターは目を覆いたくなった。

もめ事が起きると、カフェの従業員が仲裁に入り、大ごとにならずに済むものだった。

だが今回は、女の威勢が良すぎた。仲裁が入る前に、女が一回ぐらいは殴られるかもしれない。平手打ちだけならともかく、蹴りまですては、まずすぎる。

「こ、この女……！！」

まともに蹴りを食らってしまい、怒りで真っ赤になっている男は、ネガール人だ。

ネガールはヴィラムと同じくビュレントの植民地だ。他のどの植民地の人間よりも、ネガール人は屈強である。女を守りたくても、守れる人間などこの場にいないだろう。

やり合って勝てる相手ではない。そもそも女のほうもこんなところへ来て、ネガール人を怒らせたのも悪いのだ。

——それに俺は、気の強すぎる女とは、しばらく関わり合いになりたくないしな。

二又を掛けたせいで刃傷沙汰にまで発展した事件を思い出し、デ

クターは事の成り行きに手を出さないことに決めた。

——美女には気の毒だが、勇敢な人間が現れるまで見物しよう。そう思ったとき、女をかばって立つ男が現れた。

「おっと、格好いい奴が、さっそく登場か。美女は得だな」

冷やかしの言葉が口から出た、次の瞬間、デクターは驚きのあまり立ち上がる。

女をかばっていたのは、グレンだったのだ。

「お、おい、いつの間に……」

デクターの呟くよりも早く、グレンはネガール人を殴り飛ばした。ケンカ慣れしているだけあって、見事な腕である。だがあまりにも無謀だった。

倒れた男の周囲を囲むように、仲間のネガール人が集まってきたのだ。

デクターは頭痛がしてきた。

先制攻撃が大事だと言っていたグレンだったが、自分が標的ではないケンカには、滅多に首を突っ込まなかった。なのに何故、いま彼女を助けねばならないのだろうか。

ネガール人たちの目は怒りに燃えている。

五対二。しかもグレン側の一人は、気が強いとはいえ女だ。しかしグレンは、あくまでも戦う気だ。

——あの馬鹿。

デクターは舌打ちした。

これでグレンは、居心地が良かったこのカフェにも、出入りできないだろう。

デクターは、ぼやいた。

「あいつも馬鹿だが、俺も馬鹿だな。ここは気に入っていたのに」
デクターは、グレンに殴りかかろうとしていた男に向かって、コーヒークップを投げつけた。

見事命中し、服をコーヒー色に染めた男が、こちらを向いた。視線だけで人を殺せそうな目つきだ。グレンに加勢するんじゃないかと、うんざりする。

「あー、手が滑った。すまなかったな。だが茶色の服も悪くないぞ」
気の抜けた声で言い訳をすると、相手は怒り狂って突進してくる。デクターはテーブルを蹴って相手に叩き込み、ひるんだ隙に、別

のテーブルにあった皿を投げた。

面白いように当たるが、状況が有利になったとは思えない。むしろ敵の怒りを煽りすぎて、悪化したような気がする。

グレンは女をかばいながら敵を倒し、デクターと合流する。

「遅いぞ」

睨むグレンに、デクターは意地悪く返す。

「助けるつもりなんか、なかったんでね」

「お前、案外薄情な奴だな」

「いまごろ知ったのか」

言いながら、敵を二人で殴り倒す。

「それよりどうやって、勝つ気だ？　いくらお前でも、この状況では勝てないだろ」

グレンは、にやりとする。

「最高に不利な状態で逃げおおせたら、たぶん奴らは自分たちが負けたと思うはずだ」

「負けを認めるかな」

「少なくとも彼女を連れ出せたら、俺たちの目的は達成だ。それでいい」

言い終わるなり、グレンは敵の拳を避けた。

ぎりぎりまで引きつけてから避けたので、敵は体勢を崩し、見物していた別の男を殴った。

「何しやがる！」

殴られた男は、殴ったネガール人に向かって行った。他の見物人が湧いた。

デクターもグレンに倣い、わざと見物人に被害が出るように攻撃を避けたり、物を投げたりした。

このカフェには、おとなしくビュレント人に使われているような人間よりも、横暴なビュレント人に、日頃から腹を立てている人間が多かった。

暴れられる機会を得て喜んでいる者もいれば、日頃溜まっていた

鬱憤を、攻撃を食らったせいで爆発させた者もいる。殴られておとなしくしている人間は、ほとんどいない。

かくして大混乱に陥った。

そろそろ頃合いだろう、とグレンが合図してきた。デクターはうなずき、そつと逃げ出した。

グレンも女の手を引いて走った。

全力で逃げ、店が見えなくなったところで、グレンは女の手を放す。

「じゃあ、気をつけて」

あまりにもあつさり女と別れようとするので、デクターは驚いた。相手は滅多にいないような美女なのだから、少しぐらいは恩を売るだろうと思っていたのだ。

だが次に起きたことは、さらに予想外だった。

女は、去つていこうとするグレンの腕を掴んだのだ。

「待つて。貴方、グレンでしょう？」

グレンは振り返らずに言う。

「あのときの借りは、いま返しましたから。お嬢様」

女は目を吊り上げる。

「昔とは違っんだから、お嬢様なんて呼ばないでよ。私の名前はアデリンよ。いいかげん、名前で呼んで」

言ったあと女——アデリンは、背中からグレンに抱きつく。

「ずつと……ずつと貴方に会いたかったのよ、グレン」

「俺は会わなければよかったと、思っています」

「じゃあどうして、いま私を助けたの？」

「ですから借りを返しただけです。……本当に、それだけですから」

——なんだ、知り合いか。

デクターは、げんなりした。グレンの女絡みの事情など、正直知りたい気分になれなかった。

「痴話げんかをするなら、俺は帰るぞ」

去ろうとするデクターを、グレンは捕まえる。

「待て、俺は痴話げんかなんかしていない」

「恋人同士じゃないのか？」

デクターは足を止め、振り返る。

「違う」

グレンとアデリンが同時に言った。

「じゃあ何なんだ」

「昔、世話になった、お嬢様だ」

アデリンの目が吊り上がる。

「お嬢様って呼ばないで！」

言い争いを聞いているうちに、デクターは頭痛がしてきた。

どのみち、この二人は過去に何かあったのだ。色恋沙汰と無関係ではないだろうが、どちらがどのぐらい相手のことを好きなのか、さっぱり分らない。

自分の危険を顧みず、アデリンを助けたわりにはグレンの態度は冷たく、いまだアデリンの顔を見ようともしない。

アデリンはグレンのことが好きであるように見えるが、ビュレント人の、しかも「お嬢様」などと呼ばれるような女が、ヴィラム人の男にどの程度本気なのか見当もつかない。

目の前にいるデクターを差し置いて、二人だけにしか分からない話をしているのも気に入らなかった。デクターは、わざと意地悪い質問をグレンにしてみる。

「もしかして彼女が、昔お前が寝たビュレント人か？」

「な……！」

間違っていたら——おそらく間違っているだろうが——グレンに殴られるだろう。

確かにグレンはデクターを殴ろうとしたが、それよりも早く、平手打ちの音が響き渡った。

「ちよっと、何なのよ、それ！」

アデリンがグレンを叩いていた。呆然とするグレンの胸ぐらを、アデリンは掴む。

「いつよ、いつなのよ。相手は誰!？」

「どうして俺が叩かれなければならないんですか」

怒りのこもった声に、アデリンが怯む。

「だ、だって……」

「貴女は短気だから、よけいな災難を背負い込むですよ。だいた
い俺が誰と寝ようと、お嬢様には関係ないでしょう?」

アデリンは手を離れた。不満そうな顔のまま呟く。

「そりゃあ、関係ないけれど……」

どうやらアデリンは、本気でグレンのことが好きなようだ。だが
グレンがどう思っているのか、デクターには、さっぱり分からない。
しよげていたアデリンだったが、急に目を爛々と輝かせる。

「そうだ。助けてもらったお礼と、いまのおわびに、お茶をごちそ
うするわ」

おわびというより、せつかく見つけたグレンを逃がすまいとして
いるような気迫だ。

グレンは冷たく言う。

「いいえ、結構です。貴女と茶を飲むと、俺に良くないことが起き
るんです」

「何よ、失礼ね。——いいわ、今度は私の自宅じゃなくて、仕事場
に招くわ。お食事なしで、お茶だけ。どう? これだったら前と条
件が違うから、貴方の考える『悪いこと』は起きないはずよ」

「……そういう問題じゃないのに」

グレンは呟いたあと、さらに不機嫌そうに言う。

「だいたい貴女の従兄殿も、俺がお嬢様に近づいたことを知ったら、
不快になると思いますよ。ご遠慮申し上げます」

アデリンは焦って言う。

「大丈夫よ。心配しなくても、マクシスなら貴方に鼻を折られて以
来、ずいぶんおとなしくなったわ。いまは従軍していて、ジェルー
マ共和国との国境地帯にある要塞線にいるの。要塞内にある映画館
で映画を見たりして、貴方のことを忘れて呑気に暮らしているわ。

だから安心して」

デクターは忍耐力を駆使して、驚きを顔に出さないように努める。ヴィラムでビュレント人の鼻を折って、無事で済んでいるとは、ただごとではない。折られたのが従兄だというのに、あっけらかんとしているアデリンのほうも、おかしい。

デクターは二人の過去が、だんだん気になってきた。

あとで聞き出そうとしても、グレンだと喋りたくないことは決して言わないだろう。

だが――アデリンなら、何でも喋ってくれそうだ。

デクターは人の良さそうな笑みを作る。

「いいじゃないか、グレン。この美しいご婦人と会うのは、久しぶりなんだろう？ 旧交を温めるのも悪くないじゃないか」

「さっきお前がよいけいなことを言っただけで、俺は殴られたんだぞ。よく平気な顔で、旧交を温めるなんて言えるな」

グレンがきつく睨んでくるが、デクターは無視し、アデリンに笑いかける。

「もしもお邪魔でなければ、俺も同席してよろしいでしょうか？

最近のグレンの様子など、いろいろとお教えいたしますよ、お嬢様」

「まあ、嬉しいわ。ええと、貴方は……」

デクターが自己紹介をすると、アデリンは嬉しそうな顔になった。「グレンのお友達なら、きつといういろいろご存じね。貴方も私のことを、お嬢様じゃなくてアデリンと呼んでね」

思ったとおり、アデリンは食いついてきた。いくらでも何でも、喋りそうである。

「じゃあ、俺は帰るから。二人で仲良くやってくれ」

立ち去ろうとするグレンを捕まえ、デクターは耳元で囁く。

「お前が同席しなかったら、美しいアデリン嬢に、いろんなことを吹き込むぞ」

「どうぞご勝手に」

「お前が彼女の名を寝言で呼びながら、枕を涙で濡らしていたと言

ってやるうか」

「おい待て！ 何だ、それ。そんなこと、あるわけないだろう？」

「眠っている間のことだぞ。本当にそう言い切れるのか？」

グレンは一瞬、動揺した。その隙にデクターはアデリンに言う。

「こいつもお茶をこちそうになりたいそうです」

グレンは否定しなかった。

アデリンは喜び、子供のよう飛び跳ねた。

「案内するわ。ついてきて」

アデリンはデクターたちから背を向け、鼻歌を歌いながら歩き始めた。

「おい」

グレンがデクターの腕を掴み、上目遣いで睨んでくる。

「俺はいつ、そんなことをやったんだ？」

嘘に決まっているじゃないかと言おうとして、デクターはグレンの目が、意外に真剣であることに気づいた。

グレンは嘘を本気にしたらしい。自分が本当にやりそうだと自覚があるのだろう。

——じゃあ、やっぱりアデリンに惚れているのか？

冷たい態度を取る理由が理解できないが、可能性は高い。

「おい、デクター。どうなんだよ」

いまのは嘘だと言う代わりに、デクターは意地悪く笑った。

「秘密だ。せつかく掴んだお前の弱みを、簡単に手放すかよ」

グレンは無言で握り拳を作った。だが結局デクターに振り下ろすことなく、最後までついてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2199s/>

東方の月 西方の翼

2011年4月29日01時12分発行